35 竹原地区の先覚者たち

―頼春風などについて―

江川義雄

江戸末期における広島地方の政治・文化の中心は東に福山藩、西に安芸藩で、当地方は二分化され発展していった。

竹原はその中間に位置し、瀬戸内沿岸に面して製塩業の先進地域として栄え、全国的には塩と米の輸送中継地として有名であって、各地の文物・文化が流入した。その産業や流通機構を背景にして、当時の武家社会とは異った豊かな商人社会による文教尊重の風潮が形成されていった。

当地区において代表される文化的人脈は頼山陽を頂点におく頼家一族であって、それらの巾広い交友には秀れた先覚者も多い。

頼山陽が余りにも高名な故に、この地方で有名であっても、全国的に表面に現われない先人もある。

本発表では、頼春風をはじめとして、その他この地方の先人達について述べることにする。

頼春風（宝暦三年・一七五三―文政八年・一八二五）名は惟彊または惟強、字は千齢または叔義であって、幼時には松三郎のちに千齢といった。

頼春水の弟である春風は明和六年、十四歳の時、父の亨翁の命で、春水について上阪し、古林見宜塾で数年間、藤岡道筑について医を学んだ。

安政二年、父が老弱になるに及び帰郷し開業した。在阪中は医学のみならず、春水や尾藤二洲らと共に朱子学を学んだ。門弟としては三原藩の儒者・石井豊洲や藤原春徳などがあり、人となりは情篤く、兄弟仲よく、山陽の子・聿庵をよく輔けた。

詩文・書にすぐれ、竹原に竹原書院を設立した。藩より七人扶持、御医師格を与えられたが、終身隠居して仕えなかった。その屋敷は現在も春風館として残っている。

著述としては『芳山小記』十一巻、『適肥』八冊、『春風館詩鈔』二巻、『春風所寄』三十二巻などがある。頼山陽

は何度も竹原を訪れ、春風に『日本外史』著述についての相談や詩文の推敲をしあったという。春風の長子は景譲と号し、兄、春水の嗣子となり、春風の娘・唯（ただ）は養子・尚平を迎え、医業を継承させた。

春風の弟であり、山陽の叔父にあたる碩儒・杏坪は藩校教授・郡代官をつとめ、『芸藩通志』などを編纂した学者であったが、杏坪は竹原の文化発展に尽した二七人を選び、祭神として祀り、郷賢祠を文政十年に建てた。それに医師として祀ったものに寺本立軒（一六五〇―一七三〇）、塩谷道碩（一七〇三―一七六四）、それに頼春風の三名をあげている。立軒は浅野藩医であったが、竹原に来て唐崎定信と共に、この地に文教の礎を築いた。塩谷道碩は藩儒・植田艮斎につき、京で学び、頼一族の師であり、詩文に秀れ、その屋敷は竹原書院として、現在も文化活動の拠点として役割を演じている。その他、吉益東洞に師事した加川元厚、中西深斎に学んだ加藤柳軒や立軒の孫・斎藤愿仲は塩谷志師につき、のち京の浅井氏につき学んだ。

特記すべき事項としては、この地において蘭学との関係がみられることである。

橋本宗吉（一七六三―一八三六）と日高涼台（一七九七―一八六六）の両人である。

宗吉（号・曇斎）は既に呉、中野、長門谷の諸氏により詳記されているところであり、涼台についての研究も諸家により数多く発表されて来たし、現在も末田氏による新資料の紹介があった。

この地からの適塾入門者としての穂波捜古、広瀬元恭塾に入門し、シーボルトに師事し熊本藩医であったといわれる穂波謙譲の名もあげられるが、現地では不詳であり、関係地域からの発表を待望せざるを得ない。

（広島県廿日市市）